



初めての看取り

〈沖縄県〉 津波 あけみ 53歳

精神科の看護師になって数年、忘れられないK氏との出会いがある。

K氏は、がんの末期で、骨まで転移し毎日のように痛みを訴え「痛い、痛い、もう死ぬよー。もう死ぬよー」と大きな声で、薬を要求していました。私は、仕事のたびに彼の元に足を運び、何かできることがないかを考えながら毎日を送るようになりました。

そんなある日、K氏が「もう、死ぬよ」と静かな声で話しました。私は、いつもと違うK氏に近寄り腰を落とし「もう死ぬの?」と問い掛けると、彼は「うん」と答えて遠くをまた見つめるのです。私は、なぜか「Kさんが死ぬとき、そばにいてもいい?」と許しを得るような気持ちで

話すと、「いいよ」と優しい声で答えてくれました。K氏との空間が満ち足りた空気に変化しました。人はいつか死にますが、看取することは怖いものではない、とそのとき知りました。

10日ほどたった、私が深夜勤務のときです。病棟の出入り口の鍵を開けると、自分の体に、初めて感じる清らかで張りつめた空気。「K氏は今日逝く」と確信しました。呼吸が速くなり苦しそうなK氏でしたが、年配の男性看護師の「Kさん、まだ死ねないよー。深呼吸してみてください」との呼び掛けに励まされ呼吸をしているようでした。声は出せなくても、死にゆく人は生きるために必死で声に応えようと、できる

ことをしているのです。

いつもなら不眠や幻聴で苦しみ、イライラしてナースステーションに誰かしら患者さんがいるものですが、その夜はK氏が亡くなるまで苦しみを訴える患者さんはいませんでした。

私は、彼が希望していたたくさんのお金を胸ポケットにいっぱい詰め、手には財布を持たせ、自分の両手はK氏の胸にあて「そばにいるよ。そばにいるよ。ありがとうねー。ありがとうね」と話し掛けました。1分間に5回呼吸をして、K氏は逝ってしまいました。私は、この看取りを通して、人の尊重と看護の喜びを知りました。看護の魅力は、実践の中にたくさんあるのです。

